



MORIOKA
ROTARY CLUB WEEKLY

第7回例会(8月21日)
平成27年8月28日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10
川徳デパート内
例 会 場 同上 TEL(651)1111(代)
例 会 日 毎週金曜日12時30分～

会 長 岩野 法光
幹 事 吉江 信博
会 報 福田 荘介
クラブ事務局 TEL(653)5682
FAX(653)5622

Be a gift to the world. "世界へのプレゼントになろう"…………… K. R. ラビンドラ



ゲスト卓話

**「自分らしく幸せに生きていく
ヒントを子ども達に」**

NPO 法人 未来図書館
恒川 かおり様

岩手大学教育学部卒業
岩手県立盛岡第一高等学校、盛岡第二高等学校、久慈水産高等学校、盛岡南高等学校教員。
退職後は専業主婦として各種ボランティア活動に従事。盛岡市内全ての児童館、児童センターの保護者組織「盛岡市母親クラブ連絡協議会初代会長」。盛岡市内の小中学校4校でスクールソーシャルワーカー、学校支援員。
平成17年よりNPO活動法人未来図書館に勤務し、「子どもと社会をつなぐ」ミッションのもと、年間約21校、約2500名の児童生徒に延べ800名の社会人や大学生をつなぐ活動を行う。

1. はじめに

本日はお声がけいただきありがとうございます。 「子どもと社会をつなぐ」活動をしております未来図書館の恒川と申します。先日の矢巾町の中学生の自殺や大阪の中学生殺人など子どもにかかわる痛ましい出来事が毎日のように報道されています。いじめにかかわるお話の前に絵本「わたしのいもうと」を紹介させていただきます。

「わたしのいもうと」

松谷みよ子 文・味戸ケイコ 絵/偕成社
この子は わたしの いもうと むこうを
むいたまま ふりむいて くないのです
いもうとの はなし きてください
いまから七年まえ わたしたちは この町に
ひっこしてきました
トラックに 乗せてもらって ふざけたり、
はしゃいだり アイスキャンディをなめたり
しながら いもうとは 小学校四年生でした
けれど 転校した 学校で あの おそろしい
いじめが はじまりました
ことばが おかしいと わらわれ とび箱が
できないと いじめられ クラスの はじさら
しと ののしられ くさい ぶたと いわれ
一ちっとも きたない子じゃないのに
いもうとが 給食をくばると うけとってくれ
ないというのです…

とうとう だれひとり 口をきいてくれなくなりました

ひと月たち ふた月たち 遠足に いったときも
いもうとは ひとりぼっちでした
やがていもうとは

学校へ いかなくなりました
ごはんもたべず 口も きかず いもうとは
だまって どこかをみつめ お医者さんの手も
ふりはらうのです

でも そのとき いもうとの からだに つね
られた あざが たくさんあるのが わかった
のです

いもうとは やせおとろえ このままでは 命
がもたないと いわれました

かあさんが 必死で かたくむすんだ くちび
るに スープをながしこみ

だきしめて だきしめて いっしょに ねむり
子もり唄を うたって ようやく いもうとは
命を とりとめました

そして まい日が ゆっくりと ながれ
いじめた子たちは 中学生になって セーラー服
で 通います ふざけっこしながら かばんを
ふりまわしながら

でも いもうとは ずうっと 部屋にとじこ
もって 本も 読みません レコードも 訊き
ません だまって どこかを 見ているのです
ふりむいても くないのです

そしてまた 年月がたち いもうとを いじめた子たちは 高校生 窓の外を 通っていきます わらいながら おしゃべりしながら…

このごろ いもうとは おりがみを 折るようになりました

あかいつる あおいつる しろいつる つるにうずまって でも やっぱり ふりむいてはくれないのです 口を きいてくれないのですかあさんは なきながら となりの へやでつるを 折ります

つるを 折っていると あの子の心が わかるような 気がするの…

ああ 私の家は つるの家

わたしは 野原を歩きます

くさはらに すわると いつのまにか わたしも つるを 折っているのです

ある日 いもうとは ひっそりと 死にました つるを 手のひらにすくって 花といっしょに入れました

いもうとのはなしは これだけです
一わたしを いじめたひとたちは

もう わたしを 忘れてしまったでしょうね
あそびたかったのに べんきょう したかったのに一

2. 児童センターで出会った子ども達

もう 20 年以上も前になりますが、「子育ては未来人材を育てるかけがえのないこと」と分かっていながらも、そして好きな仕事（高校教員でした）を辞め専業主婦になることを自分で選択したにもかかわらず、家庭でぼつんと子育てに専念することが社会から取り残されたような「孤独」を感じておりました。

誰かとおつながりたくて、児童センターでのボランティア活動をするようになったのです。

当時は、「公園デビュー」という言葉もあり公園に行けば他の子育て中の方と出会えるくらい専業主婦もわりとおりましたから、町内会や子ども会、児童センターなどは、退職された年配の方や専業主婦が地域を支える担い手として活躍していたと思います。

そうして、児童センターで、子ども達や母親

達と触れ合うのはとても楽しくやりがいもあり充実した毎日で、学ぶことも多く「子育て」は「自分育て」なのだなど実感した事を覚えています。

私がお世話になった児童センターは小学校 1 年生から 3 年生くらいまで 100 人くらいの子どもが学童保育の代わりに利用していて、小学生以外にも開放されていました。子ども達と一緒に地域の老人会の方に年縄を教えていただいたり、みずき団子をつくったり、遠足やデイキャンプなどとても楽しく活動しておりました。

児童センターの子ども達の中には、他の子をたたいたり、物を投げたり、厚生員の先生に抱きついて離れない子もいました。冬休みのある日、いつも気になる行動をとる子に「冬休みでもお父さんもお母さんもお仕事頑張っているんだね」と声をかけると、「今日はお父さんはお休みでスキーに、お母さんは映画に行ったんだよ」と。また問題行動が多い他の子は、「朝起きると机の上に 500 円がおいてあるの。夕飯はカップラーメンを食べれば残りがお小遣いになるんだよ」と話し、驚いたことがありました。

また、川遊びで小学生が亡くなったり、平和のシンボルのはずの公園が宮崎事件の事件現場となっていたり、遊具での事故や 17 歳の犯罪と立て続けの報道などの出来事があり、危険なものを子ども達から遠ざける風潮（例えば、遊具を撤去する）が強まっていったように思います。

児童虐待や顔見知りによる事件報道も頻繁に目にするようになり、「こども 110」の家が増えたのもこのあたりからでした。厚労省の統計によれば、教育熱心と語られる家庭の子どもの犯罪や心中を含めれば 3 日に一人の割合で子どもが死亡していることが（2005 年）当時所属していた盛岡市母親クラブ連絡協議会の取組「子ども達が安心してくらせる街をめざして」冊子に記載されています。

3. 学校支援員時代

下の娘が中学になり、ご縁があつて現在の NPO でお仕事させていただけるようになりました。とはいえ、NPO は経営が不安定なため、

賃金が捻出できない時が2年ほどあり、息子の仕送りもあって盛岡市内の小中学校4校で、学校支援員を勤めました。

小学校では不登校児童の家庭に伺い担任の先生との連絡役をするのが主な仕事で、中学校では、別室登校の生徒の安全を見守る仕事为主な役割でした。臨床心理士の先生が週に一回来てくれましたので、その先生におつなぎしたり、ご両親のお話を伺ったりしたのですが、「いじめ」について深く考えさせられたのはこの頃です。

まず、病気や経済的ではなく、何かしらの理由で年度間に30日以上欠席のある児童生徒を不登校と定義しておりますが、岩手統計白書では平成24年度の県内小中学校の不登校児童生徒は1,047人と記載されています。

私の携わった中学校では、1クラス5~6名の生徒が不登校、もしくは別室登校の状況でした。

いじめが原因で学校に通えなくなった不登校の生徒と実際に話ができたのは4名ほどでしたが、そのうちの一人が、親に心配をかけたくなくて登校しているふりをしていました。行くあてもなくさまよって病院の待合室だと怪しまれないと話していたことがありました。

また別室には一日およそ3名ほどの生徒がいました。彼らからきいた話も胸が痛くなるものばかりでした。野球部に所属していたある男子生徒が「掃除の時間になると掃除道具を他の部員がもって行ってしまふ。事情を知らない顧問の先生に「掃除をしろ」と怒鳴られる。」とか、合宿のご飯にゴミをいられる、教科書を破かれた、などなど。自分は価値のない人間だと苦しみ、学校現場で包丁で自分のおなかをさしてしまふ生徒もいました。

また、そのつもりがないのに、知らず知らずの間にいじめる側になってしまう生徒も少なくありませんでした。大人でも子どもでも、良心はもちろん、いじめる心、いろんな心も持っていて、無自覚のうちに加害者になってしまったり、被害者になることもある。誰にとっても他人ごとではない。いじめの問題は人間がいる限

りなくなるような単純なものではないのではないか、学校と家庭、自分の行動範囲半径50メートルくらいの中で、自分の世界を限定して捉えることはとても残念だ、子ども達には、もっとでっかい世界があることを知らせなければならぬと漠然と考えたりしていました。

4. まとめ

育ちの中で強烈に自己肯定感を失い『自分はダメな人間だ。』と自分を責め続け自分を大切にできなくなってしまう児童生徒。

今これからどうすればいいのか、と未来を考えるのではなく、起こってしまった出来事を、環境のせい、親のせい、教師のせい、とお互いに犯人探しをする大人達。

悩み、苦しみ、身動きできない子ども達や大人達と沢山接する中で、私は、乱暴かもしれませんが、完全に安全・安心・平和な世界、人間がいる限りいじめのない世界なんてきつとない、と感じています。

だからこそ、危機に直面したときに自分の力で解決できるような知恵やスキルは自分の中にあるという「自信」を子ども達に与える事が大人の務めなのではないでしょうか。

危ないことを規制しても、また違う危ない事が起こると思いますし、「気にかかる子、他の子に影響があると引き離してしまう」発想が学校現場にも児童センターにもありますが、子どもだけでなく、大人も、色々な考え、いろいろな生き方の人たちが混ざる中でしか、そしてお互いを認め合う中からしか安心な社会は生まれてこないと思うのです。

小さい頃、虐待をされていたという人から「大人になって豊かな出会いがあり今とても幸せな人生を過ごしています。」と聴いた事があります。

人はどんなに傷ついていても、人との出会いで回復する力があるということなのでしょう。

そして、全てのこどもたちは成長したがっていると思います。とても素直に、もっと賢く、もっと強くなることを求めているように感じています。

未来図書館では、多様な生き方、価値感をで

きるだけ子ども時代に知って欲しい、全ての人の人生は価値がある。ひとりひとりの大人の物語を直接大人と出会うことで自分を考える「きっかけ」にして欲しい。自分らしく幸せに生きていくヒントを見つけてくれたら、との思いで、県内の小中高校の授業の中で大人と子どもが学び合う「未来パスポート」という取組を行っています。

子どもと大人が学び合うこの取組にぜひ、皆様のお力をいただけたらと期待しています。

紹介 DVD 映像

- 「あなたの人生が子どもたちの参考書になる」
30 秒
- 「未来を借りよう。未来を貸し出そう。未来図書館」95 秒

皆様もぜひ、学校現場にいらっしゃいませんか？ 皆様のご参加お待ちしております。

ご清聴ありがとうございました。